



No.96 2020.12.14

明石市コミュニティ・スクールだより
人をつなぎ 未来をつなぐ 明石のコミュニティ・スクール

コミコミスクスク

KOMIKOMISUKUSUKU
明石市教育委員会事務局学校教育課



コミスク TwitterQR

本年度 2 回目の松が丘サミットが開催されました

松が丘小学校では、12月4日（金）、当日予定されていた参観日がコロナの第3波の関係では中止されましたが、松が丘プロジェクトを見直すための松が丘サミットⅡが会場を体育館に移し保護者の方、地域の方も参加していただき開催することができました。活動する中で見えてきた課題を出し合い、活動をより充実させるための話し合いが行われました。ここで出てきた課題は活動したから実感した課題であり、“地区に5年が少ない”など自分の地域の実情など、こうした活動をしなかったらリアルに感じることはなかったのではと思います。活動する中でだんだんと地域が見えてきて、社会を考えるようになっていくんだろうなと思いました。

意見

- ・月1回では少ない
- ・何をしているのかや参加の仕方がわからない
- ・参加人数が少ない
- ・地区に5年が少ない
- ・地域の方と触れ合えていない
- ・捨てられているゴミが多い
- ・掃除道具が少ない
- ・ごみの持ち帰りをどうするか

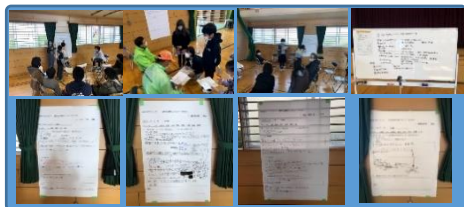
話し合ったこと

- 決まった日以外にも行う
- 旗（のぼり）を作る
- チラシを配って呼びかけする
- 大人と子どもで協力する
- 小グループで活動し自分から話しかける
- プロジェクトで実行する
- 地域の方にも協力してもらう
- 自分たちで持ち帰るか地域の人に頼む

来年度の取組

園芸クラブを作れないか 高齢者宅のゴミ出しの継続 通学路の落ち葉拾い

また、子どもたちの支援ボランティアとして学校にきてくれている、松が丘小の卒業生等学生さんも参加していただき、子どもたちだけでなく、卒業生も参加できる流れができていったら面白いなと思いました。また、こうした地域のリアルな課題に触れる場を積み重ねてきているだけに、5年生に引き継ぐだけでなく、子どもたちが活動に継続してかかわっていける仕組みを作っていくのが中学校区としてのコミュニティ・スクールの次の課題になっていくと考えます。（文責：北本）



また、こうした地域のリアルな課題に触れる場を積み重ねてきているだけに、5年生に引き継ぐだけでなく、子どもたちが活動に継続してかかわっていける仕組みを作っていくのが中学校区としてのコミュニティ・スクールの次の課題になっていくと考えます。（文責：北本）

朝霧小児童会&あすあさ会(あさぎりまちづくり協議会プロジェクトチーム) 交流 朝霧のまちづくりを考える

朝霧小学校では12月9日（水）の委員会活動の時間に、コロナの影響で中止になった夏の盆踊り大会の持ち方を含め、朝霧のまちに住む人をつないでいく方法を一緒に考えてほしいというあすあさ会さんの投げからから、朝霧小学校の児童会とあすあさ会の方との交流会



が持たれました。45分という限られた時間の中でしたが、6年生の子どもたちはちょうど国語で“町の未来を描こう”という学習の中で自分たちも朝霧のまちづくりについて考えていたことや、3年の時に朝霧川や朝霧山で環境学習を行ったという共通の体験をしているというベースもあり、リアルな提案が出されました。“コロナで思いっきり楽しむことができなかつたので大人も子どもも思いっきり楽しめる運動会”・“子どもも大人の人も色々発表や展示ができる学園祭のようなもの”・“朝霧川や朝霧山で四季の変化を感じられるイベント”・“自分たちで屋台を出せるお祭り”といったものから、“朝霧川の清掃後ごみを分別しどこからそのごみがやってきているかなど地域の方と話し合いたい”、“普段環境についてはインター



ネットで調べているが、実際に地域の方から生の話を聞きたい”といった社会課題に向き合っていくようなことまで多様な視点からの提案が出され、あすあさ会の方も子どもたちから出される意見に熱心に耳を傾けておられました。

今日、子どもたちから提案されたことは次のあすあさ会で熟議され、これから子どもたちとあすあさ会さんの間で実現に向けた、より具体的な熟議が始まるのではと思います。終わってからあすあさ会のメンバーの方が「6年生の子

たちは卒業するけど、関わってもらえるようになったらいいな」と言われていたのが大変印象的でした。

(文責:北本)

松が丘小学校第2回学校運営協議会に参加して

実写版「子どもを核とした地域づくり」を目の当たりにしました

12月10日(木)に開催された松が丘小学校コミュニティ・スクール第2回学校運営協議会に出席させていただきました。そこで話し合われた内容の中心には常に「子ども」があり、「子どもを核とした地域づくり」が確然たるものになってきているという実感を覚えめました。話し合われた内容はさることながら、会の雰囲気も終始受容的かつ対話的であり、質の高い学校運営協議会となりました。会の内容は、次の2つが柱となりました。

- ① 2学期を振り返って
 - …6年生の修学旅行、5年生の自然学校、運動会、音楽会、全学年の特徴的な学習活動について
- ② 松が丘プロジェクト2020
 - …松が丘プロジェクトのイベント活動及び常時活動の様子。松が丘サミットIIで話し合われたことについて

①2学期を振り返って

西原校長先生がスライドを映し出しながら学校行事等について、ていねいに説明されました。コロナ禍において様々なことに配慮された上での実施の様子が、子どもたちの写真とも相まって、とてもよくわかりました。学校運営協議会の委員さんからは、「子どもたち

の活動の様子がよくわかった。活動がとても工夫されていて縮小されたという印象は受けない。」「子どもの活動を充実させるために、学校の先生がいかに苦勞をされているのかが伝わってきた。」「前例を踏襲することが多かったと思うが、このように考えて工夫して実施できたことが大きな成果だろう。」という声が上がりました。

②松が丘プロジェクト 2020

松が丘プロジェクト、松が丘サミットについて西原校長先生より説明された後、子どもたちが行っているイベント活動、常時活動について、次のような声が上がりました。



学校運営協議会の方

私も、子どもたちと一緒に地域のために活動したいし、私の周りにも活動に意欲的な人たちがたくさんいます。でもいつ、どこで活動しているかがわからなくて、活動できずにいるので、みんなに知らせるために、何かよい方法はないですかね。

回覧板や掲示板を活用して、子どもたちも活動の日時や内容を発信しているにもかかわらず、その内容が地域に行き届いていないという実態が浮かび上がってきました。何よりも地域の方の中に、子どもたちが計画した活動に参加したいのに参加できないでいる方が多数いらっしゃるということが明らかになりました。その方にもきちんと案内できるようにするための方策が議論の中心となりました。話し合いの結果として、それぞれのグループや組織で機能している LINE 等のデジタルな方法を使って、できる限り広く案内していくことと、これまで行っている回覧板、掲示板を活用しながらも決まった場所、決まった時期という「定点・定時」的な具合で案内をしていく両方、つまり「ハイブリッドなアナウンス」を行っていくということになりました。また、常時活動として位置づいている地域のごみ拾いをした後の、ごみの回収の仕方等についても具体的な方法が出されました。拾ったごみを子どもたちが各家庭に持ち帰らなくてもよいように各自治会の決められた場所に置いておくという具体的な方策が出されました。この話題の最後に、西原校長先生から「協力していただいている地域の方の世代には開きがあるため、その世代を埋めるための方策を考えていきたい」という話がありました。

このように、大変深まりのある学校運営協議会となりました。冒頭でも言いましたが、松が丘の子どもたちが終始議論の中心にあったこと、子どもたちの願いに寄り添うために何ができるのかという具体的な話し合いが進められたこと、これらが議論の「深まり」につながったと捉えています。同席した私も会の充実感を味わうことができました。

その充実感から新たな発想が生まれてきました。それは、今回のように子どもを核とした議論がなされている学校運営協議会の場には、子どもが参加することも意義あることではないかということです。実際にその会に子どもが同席したり、学校運営協議会を教室に配信して、子どもがオンラインで参加したりすることも現実的ではないかと考えました。そのような可能性の広がり期待高まる学校運営協議会となりました。

また、会の最後には西原校長先生からは、1人1台に配布されるタブレット端末の整備状況についても話があり、新しい教育環境の導入に向けて地域・保護者の方も関心を示されていました。教育環境が大きく変化する今の状況こそオープンにし、学校・地域・家庭が一体となって変革を迎え入れていくことが重要なのだと実感しました。

(文責：本所)

まさに「未来の教室」について対話が深まりました。

Meet de 対話 Part 3 (第1回) は、“経済産業省「未来の教室」プロジェクト～教育イノベーションの施策の現在地点～” 浅野大介氏のプレゼンの内容について考えたことをもとに参加者の皆さんと対話を深めていきました。

今回は学校ボランティアとして活躍されている地域の方にも参加いただきました。地域の方に参加いただいたのは、Meet de 対話始まって以来“初”でした。地域の方に入っただけしたことにより、対話がより深まりました。その様子を報告させていただきます。経産省浅野大介氏のプレゼンを視聴された感想をお話しいただく中で、議論の中心が次のことに焦点化していきました。



(浅野大介氏が言う通り)「学びの個別最適化」の実現と標準授業時数を確保することは矛盾するのではないのだろうか。

まずは「個別に最適化された学びとは、一体どのようなものなのか」というイメージについて、に参加者の皆さんご意見をいただきました。皆さんから出された、イメージを下にまとめました。

<個別に最適化された学びとは、一体どのようなものなのか>

- ・例えば、書写の作品にも表れるように、子どもたちが表出したものを見て初めて子どもの実態が見取れることもある。一斉指導においては、個々の学習の進度に合わせて個別に指導することは困難である。本来、本人に適した学習進度で進めていくことが「個別に最適化された学び」ではないか。
- ・「個別に最適化された学び」とは理解に課題がある子どもへの支援だけでなく、「先へ進みたい」という意欲がある子どもへの支援も考えていくべきである。
- ・「個別に最適化された学び」を保障するためには、教師が子どもの情報をいかに正しく見取っていくかが重要である。
- ・子どもの学びは担任の先生、または指導する先生との「信頼関係」にも左右される。個人の学びを見取る際、結果に目を向けることも大切だが、どのように学んだのかを知ることも「個別に最適化された学び」を保障する上で大変重要である。

これらの意見が出されました。ICT 機器の活用によって生み出される時間を個別に最適化された学びを生み出す時間に活用することを考えると、現在の標準授業時数の考え方の整合が難しくなるという結論に至りました。しかし、標準授業時数の枠組みを活用し、学習内容を確保した上で捻出した時間を、教科ごとだけで活用するのではなく、教育課程全体で“紡ぎ合わせて”教科等横断的にダイナミックな探究的な単元を構想してみても、という意見も出されました。大変充実した対話の機会をもつことができました。物事の本質に迫る議論をするためには、校種や職種を越えた方の意見が必要なのだと強く感じました。私自身、これまで口にしてきた言葉も理解が及んでいなかったことに気づかされ、学び多き機会となりました。来週、再来週にわたってあと2回実施しますので、ぜひご参加いただき、皆さんと対話できればと思います。(文責：本所)